スラウェシ島（２０１８・１１・１４）

９月２８日、インドネシアのスラウェシ島でＭ７．５の大地震があった。１１ｍを超す津波と液状化現象で町は壊滅的な大惨事となった。死者は２，０００人を超え、不明者は５，０００人以

上と報じられている。１ヶ月過ぎた現在も復興が進んでいない。

バタム島に駐在していた１９９７年２月、日本人スタッフと休日を利用してスラウェシ島に行った。地震のニュースを聞いて、他人事とは思えなかった。インドネシアは、ジャカルタやバリ島が有名だが、スラウェシ島はあまり馴染みがない。それがこの島に行こうと思い立った理由だ。年配の人は旧セレベス島といえば、ああそうかと思う人がいるだろう。

スラウェシ島の面積は日本本州の７８％、人口は約１，０００万人である。我々が訪れたのは、北スラウェシ州のマナドだ（地図の右上）。今回地震がおきたのは中部スラウェシ州のパル（中央部分）で、マナドから約１，０００Ｋｍ離れている。マナドは北スラウェシ州の州都で政治・経済の中心である。かつてスラウェシ島はオランダの植民地だった。東インド会社が香料や鉱物資源の貿易中継基地として、マナドに領事館を置いた。オランダ人との混血が多く、美人の産地という（写真はガイドさん）。インドネシアはイスラム教国だが、マナドは７０％がキリスト教徒だ。これもオランダの影響である。そういえば、ヘチャブ（スカーフ）やブルカ（マント）を着けた女性は見かけなかった。

スラウェシ島は交通インフラが遅れている。鉄道も高速道路もない。第２次大戦中、日本軍が駐留した。軍事物資を運ぶため、鉄道敷設の計画があった。京成電鉄がやる予定だったという。最近、鉄道事業の復活案が具体化し、着工の準備が始まった。バス、タクシーはあるが、ベンデ

ィという４人乗りの２輪馬車が庶民の足になっている。

主たる産業は香料やコーヒーの他、ニッケルなどの鉱物資源と農林水産業で、第２次産業はない。経済的には取り残されているが、自然が豊かで素朴なたたずまいが漂っている。

スラウェシ島は海がきれいだ。エメラルドグリーンで透明度が高い。近年スキューバダイビングのスポットとして注目されている。我々もブナケン島に渡り遊泳を楽しんだ。この島は海洋国立公園になっている。サンゴ礁やウミガメ、熱帯魚を間近に見ることが出来る。

パサールという伝統市場に行った。野菜、果物、魚介類、肉、日用雑貨の店が軒を並べている。店頭で犬をバーナーで焼いていた。この島では犬を食べる習慣がある。それにしても、目の前で丸ごと焼くのを見るのは残酷だ。

墓地に行った。墓石がユニークだ。屋根がついていて、そこに人形が二体乗っている（左）。

沖縄の屋根付き墓石（中）や琉球の古い墓（右）によく似ている。海沿いに伝わったのだろうか。十字架がないので、原住民の伝統的な墓石なのだろう。インドネシアは今でも土葬、風葬がある。

マイクロバスで海岸線を走った。沿道にはところどころに果物や食べ物、お土産を売っている露店が現れる。私は原住民が作った木彫りやアンティークに興味があり、それらしい店があるとついつい立ち寄って見たくなる。

途中にそれっぽい店を見つけ、車を停めて中に入った。古い陶磁器が陳列されていた。しかし駄モノばかりで、気を引くようなものはなかった。店番のオバさんがもっといいものを見たいなら、母屋にあるので案内するよ、と言った。観光の途中なので、帰りに寄るよ、と言って目的地に向かった。

帰路再び立ち寄ると、約束通り母屋に案内してくれた。海に面した大きな屋敷だった。前庭にクルーザーが置いてあった。聞くと漁業を営むオーナーの家だった。広い応接間にはアンティークの家具、絨毯、動物のはく製、照明器具、絵画、陶磁器類がところ狭ましと飾ってあった。さながら私設の美術館だった。

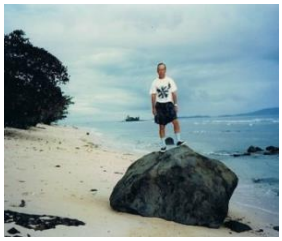
ご主人は中国製の骨董が趣味で、奥さんは日本製が好みだった。夫婦そろって骨董品の蒐集が趣味だった。私にとってはどれもこれもほしいものばかりだった。お目当ては古伊万里だったが、高くて手が出ない。明治の印判の大皿２枚（右の写真）を粘って頒けてもらった。スラウェシ島にこんな粋人がいるとは思いもよらなかった。

ジャカルタにジャラン・スラバヤと言う骨董街がある。５００ｍ程の通りに、２００軒を超す骨董店が並んでいる。陶磁器、楽器、家具、絵画、刀剣などジャンル別に店がある。ジャカルタにこれほど大きな骨董街があるのは、オランダ東インド会社の拠点があったからだ。コレクターにとっては必見の場所である。

インドネシアは多様性に富んだ国である。原始時代の風俗・習慣・文化が残る秘境があちこちにある。そのひとつがスラウェシ島だ。中部山岳地帯のタナ・トラジャは天国に近い神々の国と呼ばれ、特異な祖先崇拝の儀礼が今も行われている神秘的な桃源郷だ。トンコナンと言う屋根の両端が反った舟形の建造物がある。白眉は葬式儀礼だ。生け贄に何頭もの牛を殺す。遺体は家形の墓地、断崖墓地、吊り下げ墓地に安置する。人類の起源に迫るヒントに出会える気がする。

同じ中部にロレ・リンドウ国立公園がある。ここには１０００年以上前に作られたバウリンドと呼ばれる石像が点在する（下の３枚）。イースター島のモアイ像（その下の２枚）とよく似ている。識者によれば同じ民族が作ったそうだ。古の時代に、遠く離れた場所で、同じ民族がよく似た巨大石像を作ったとは驚きだ。古代文明のマニアでなくともロマンを掻き立てられるではないか。

スラウェシ島を再び訪れる機会は先ずないが、もし行けるなら原始が息づく中部スラウェシ地方を訪ねてみたい。



お読みいただきテルマカシー（ありがとう）。